Introduce——

シェリング・プラウ株式会社

業績向上を図るオフィスを創造

——営業部門と研究開発部門における情報の共有化——

シェリング・プラウ株式会社は、アメリカニュージャージーに本社を置き、世界120ヵ国以上に展開する医薬品企業、シェリング・プラウコーポレーションの日本における直系法人。大阪本社をはじめ日本国内各所に事業所を置いているが、営業部門である東京支店の拡張および研究開発部門の大阪からの移設に伴い、本年6月、恵比寿に新たなオフィスを開設した。同オフィスでは、営業部門と研究開発部門が同一フロアに同居。同社は、部門間の情報の共有化を図り、業績向上につなげる経営戦略に基づき、新たな形態のオフィスを創造した。

▲応接室
受付のデザインと同様の基調で、壁とインテリアが木目調で統一されており、和やかで落ち着いた雰囲気のなかで商談ができる。

アウトソーシングで、効率よくコストパフォーマンスに優れたオフィスを創設。

▲営業部門の執務スペース
デスクのレイアウトパターンを統一し、それにあわせて組織や人を配置する。組織変更や人員の増減があっても、レイアウト変更や配線工事ができる限り発生しないように考慮されている。

情報を最大限に活用できるオフィスづくり

今回のオフィスづくりで最も特徴的なのは、営業部門と研究開発部門が同じフロアに同居していること。両部門は業務内容や勤務形態が全く違うので、医薬品業界では珍しい試みである。同居のねらいは、部門間のコミュニケーションを密にすることで情報の共有化を促進し、その相乗効果によりそれぞれの業績を向上させることにある。それは、情報ソースが集中する東京に研究開発部門を移設し、東京の営業部門を強化することで、情報の収集力と活用力を最大限に機能させようとする経営戦略を推進するための仕組みづくりでもある。

しかし、実際に情報を共有化できるオフィスをつくるには、かなりの苦労があった。それは、研究開発部門では何段階にもわたってチェックがかかるセキュリティが必要となることに起因する。一般的なオフィスに求められるセキュリティとは、やはり違ってくる。今回のオフィス設計を手掛けた㈱イトーキ・販売推進部デザイン室課長の中山康夫氏は、「当初は、デスクのレイアウトパターンを統一し、組織や人をそれに対応して配置するユニバーサルオフィスをつくろうと考えていたのですが、結局、研究開発部門を他と区別して仕切ることになりました。ただし、社員の方が、セキュリティのチェックを受けながらオフィス内を往き来しても、ストレスを感じないように、さまざまな工夫は施しています」と苦心のほどを語る。セキュリティが、部門間のコミュニケーションの阻害要因にならないように、配慮されている。

「例えば、量産品を多少加工したインテリアを使用するなど、オフィスの内装やレイアウトに関しては、できる限りコストを抑えながらも、機能性、快適性を最大限に追求しています」とオフィス設計のキーポイントを語るのは、㈱イトーキ・プロジェクトディレクターの平野啓一郎氏。執務ゾーンはシルバーメタリック調の先進的なイメージとし、会議室や接客スペースなどのコラボレートゾーンは木目調の和やかで落ち着いたイメージで統一を図り、ハイテクな機能とハイタッチな感性をバランスよく調和させたオフィスを創出している。

アウトソーシングにより、移転プロジェクトを推進

シェリング・プラウ(株)では、今回の移転に際し、移転プロジェクトのマネジメントを、不動産仲介会社にリーシングとあわせてアウトソーシングした。実際に移転するとなると、内装、電気、電話などさまざまな工事が発生し、それぞれの施工業者とビルの管理会社との間に立って調整が必要となる。これらのことを短期間に集中して行わなければならず、他の通常業務を持つ社員に担当させるのは、あまりにも効率が悪い。そこで、専門的なノウハウやスキルを持つプロに委託し、合理的に移転プロジェクトを推進することとなった。シェリング・プラウ(株)総務部では、もし、自社で行っていたら、倍の時間と経費をかけても、満足のいくオフィスはつくれなかっただろうと、プロジェクト・マネジメントをアウトソーシングするメリットを挙げている。また、同社担当者は、仲介手数料とは別に委託料を支払うことを前提に委託先を選定したという。「フィーを支払うことは、責任の所在を明確にすることです。無料だと、不備があっても徹底的に責任追及ができなくなります」。コスト削減は企業の命題であるが、それは金額の多寡ではなく、高いコストパフォーマンスを追い求めることに他ならない。

▲大会議室
可動式のパーテーションで、最大3分割に間仕切ることができ、使用目的に応じて効率的なスペース活用が可能。

▲AV会議室
テレビ会議の際、画面と隣りの人の顔が重なるのを避けるため余計な動作をしなくて済むよう、扇形に開いた「コンパステーブル」を採用。

▲研究開発部門の執務スペース
営業部門と同様に、同一ユニットを整然と並べるレイアウトを採用。デスクは作業スペースが広いL字型デスクを採用。